

郭著聞集

六

新著聞集

往生篇第十三

念力日光山了詣す 芥と二子に囑す

網ひき利糸水より立終る

化人夢より入る詩と賦して終るを告

紫雲彩花諸人舉て拜す

大坂妙喜別時念佛

終るひかりて神祇了供物とて人奉る

姉乃龜夢より入り念仏のすれりよと告



絹川乃二灵念仏生て轉す

妬鬼くひと抱て念仏往生す

山鬼回向をうやうと拒難す

若女聖号で唱へ終る 足で翹て念仏を母聖端で夢

幼女呪おび仏名をうやう

八歳の童子呪うて念佛す

白子の宗西終るのうんて遺語

龍燈室へ入る彩花空る元

大はの樵夫はうへに化佛と云ふ

灰て行寺を知る 高誼衣を掩ふ

和州須西日と期して西るし

恒式了るす 書とぬいて終る

預り葬所をうやう 誓願寺へ四十二年詣す

臥る蓮臺を擁す 生鬼寺を詣す

六歳の童子地を珍る戯る

四歳の童子何れかめ灰期を云ふ

知遷和尚怨霊と問答す

七歳の童子海をうやう 来迎を拜す

壯婦の如く聖衆と拜す
如來降臨し、多し勢至摩頂し、
與く九氣西し、倒て卒す
佐久間の竹黄金宮に生す
二通和尚法坐入威す
毫光室に滿
遺骨念珠も舍利なる
乃ち蓮臺と拜し、異香室に薰す
念信法師三たび好相と感す
利春法師友に辭して即ち往く

骨舍利に他し、灰紫色に變す
爰中より三たび聖告をうけり
異香四方に薫し、花より多し
無智の信男天に來迎
珂軟和尚茶毘毘郁
慈愛信女聖相現前
壇通和尚遺骨舍利
屋上紫雲灰裏舍利
父母往生の傍相と告

幼女遺骨踞踞合掌

蕨生して冥途の舍利と持来す

川崎教俊高曲終るところ

大坂の事西法流して終るところ

念力日光山を詣す

成頼隼人西尾張りて病ひくわし我はひん限
里あんなまね志日光山を詣りて終るる人
おひりとして先は戸を下る日光山の僧さ
ま一時一族乃衣中より取りぬきくわし重
病り競ひのり無期なりとをしるばものいふぬ
我病をハ達せざるも清き日と待ちて終らん
とて七日をぬり水に衣服をくわしぬ
いふなり川の流るるに息をくわしぬ

それより南光坊より八日光山よりわかれ一日の
それより東照宮より清廟前へ集りて
参詣りて見えてぬ今こそ世と別れ
少く感慨一頓てけり飛脚として一騎の
清廟へ参りて述ぶるひと是れのお家の記録及
上野二師乃縁起をせしめし

斧と二子了喙了

大坂おきき乃吉衆といふ者ハ本ハ武士として今
ゆくりし人といふは非なり

一向の念仏者といひし病者の重きなりとてつて轉苦
の所や之を因をききしり吉衆我ハ今
参りて生きたるなりといふも一たび志す
と述ぶるひと兄弟のふたなりとて
食ふもれを遺るもゆかりとて斧一挺つ
是れとて斧と割る世と安く候ふ我成後の
より金のなりとてお家の下より鎌二貫文
出りしなりといふも一桶入り安し
とていふなりといふも一は不乱し和名

網巾
和
衞
水
了
立
終
る

阿州中郡黒土村に於て網曳利素と云者ハ
平生人の話をして平心正二の念仏者なり網曳
りも口の墮ちて稱名一なりや故にや其人
よりも奥多きともある程なりやとて
終つてついに寛文七年己未の日に親教を以て
自ハ今日往生するなり世の名を網曳り孟さん
と云ふ人物のねまといふいなりと孟さん
と云ふ人

ありあのくさるに念に口をれいふふな大事、さて
 けりてけづくともぬりせれうも候ふなり腰
 限り水了候て西了いひ合掌し念仏高ら
 ろう唱へて立て居あらず時やて後うん
 ばへいあやうとるういりる往生とて候ふ
 いふぬらの田云うハ我生生了るといひしく雷電
 ゑづいりあひしうと人々すすてあらず候て
 ちのち後ハ大旱魃なりしう晴天にさう曇り
 雷ぞろろき電ひくき、一里くくそのわど雨車油

と流しつ村の老翁がぶるも五々も
肝に染感（こころにしみ）あり

化人夢（けにんむ）了入詩と賦と終と告

江戸五川伯船寺修（しゆ）延宝七（えんほしち）年正月平賀（へいが）の差（さ）に

高僧（こうそう）まゝせぬハ末（すえ）の二月（にがつ）在（あ）りてあけぬるなり

それゆゑなりとて詩と賦とをとりてしる

六十四年（ろくじゅうよんねん）温世塵（おんせじん）夢中（むちゆう）不覺（ふかく）養残身（やうざんみ）

不來（ふき）不主（ふしゅ）是何者（いかんもの）二月（にがつ）花開（はなひらく）南谷（なんこ）春（はる）

聖朝（せいちょう）といふや口癖（くちくせ）の法（はふ）云（い）ひ明（あ）る庚申（こうしん）

もの元（もと）日の發（は）台（だい）了（りょう）

えどぶどうのぬがゆ（？）中（ちゆう）の心（こころ）

とい戯（た）れて二月（にがつ）中旬（ちゆうぐん）うを連（い）例（れい）のん代（よ）りてめ

慍（いん）むももろく亦（また）四（よ）日（にち）了（りょう）卒（そつ）に來（き）りて念（ねん）て候（こう）

終（は）りてふ人（ひと）を起（お）りて大（おほ）いねとぬと伝（でん）ふ

おろろろあれど他の囃（わ）すも多（おほ）なりとて心（こころ）に

いりり目（め）をいりりしす人（ひと）慍（いん）愧（かい）あり

紫雲（しうん）彩花（さいか）諸人（しよじん）奉（ほう）て了（りょう）す

寛永三（かんえいさん）の月（つき）十六（じゅうろく）日（にち）了（りょう）崇源院（しうげんいん）殿（でん）遠例（えんれい）のりて

多岐にわたる一心を
 称名にこころをこめて
 うや西の宵に紫雲三すべ
 ぶきの花空中に爛漫と
 奉て供えし中より三尊の
 ものつとて日課を勤め
 ありとや

大坂
歎喜
別時
念佛

大坂より伊賀屋妙喜より江戸へ信心堅固の念仏者より、
 内道頓堀の千日寺に専念を招き我ハ

望二日一往生するを別時ほめてゐるなりと云ふは
 まやかしくいふやう妙喜と云ふく通夜し
 唯一つ妙喜といふ我生を明かしのいて来月廿二日
 ちるび来りぬとて釈と齊設てさうある次の日
 五日了笑納のしく清くもて使をばり
 ちるび専念もやひその王城ゆく来りてはめぬ
 東白く回向一専念、次より出て茶を吞ちあ
 る隣り夫婦来りて妙喜の生ハいと云々
 此のえもとぬ日やき香りけしきやうに安んず

まゝびき〜と云は今おハ別甘念仏〜ぬき
仏お〜回向〜君ら〜例のうさぐちやうに
長き回向〜の勞れもつらん〜と叫ハ〜
呼吸の音も〜し〜

終〜し〜と云は〜世を〜

大坂の橋所〜十一屋宗佐〜りよ者の妻若き〜
書典〜の〜佛法〜信仰〜本性〜
慈愛〜に似〜延宝ハ〜月〜日〜
詰〜前〜百日素齋〜して〜
女

堂〜お〜金自ハ〜てま〜白〜し股〜脚〜
鉢盂〜の〜三人〜の大服拾〜と〜
院壇上谷〜院〜お〜煩れ〜恙なく下向セ
し〜也天和ニ〜時夜〜煩い既〜條〜
か〜ん〜〜世の〜い〜
ら〜そ〜日〜おの〜
純一〜稱名〜
婦の靈夢〜念仏の勝〜と告

江戸尾張町清水屋〜と〜者の後室智新〜

其來のいゝうにて天和三の五月言ふ念仏の聲
と云ふ大御方一聖の三月言ふ智恵の妹
ハ五松原の弁々妻たりしかそのゆゑに智恵来て我
ハ安養一うて微妙の快ふと極め一うにハ
我がすうそ光のま言で唱らる尤も貴き
ものれを回一ハ念仏してふれと慰ふ
告て差さめゆ

絹川の二霊念仏生で轉す

下総邑白郡一郡丹生村の靈あるといふ者ハ入り

ててりし其妻乃ハ其孫の妻甚く醜きれにやに
心づくもやういさへせ者られぬ絹川よりそい
り突た一沈め殺一同村の法務寺なる妙林と
法名一吊いしハ正保四年八月十一日やそのち
とたつ妻と逢ゆきとも死せりりふ人うさめ
乃妻しすめ菊で産菊十三葉乃寛文十一のハ
月中旬一母ハ身懷く一聖の二月四日より
菊いゝ病日こ一おのるも同く亦三日より
泡と吐眼といゝし父とけく我ハ二千五百葉上

絹川了て教あり——果ちて我々の法を
寺村の法をもちて——見——とて、乃て
しきりた云——人々恐き、噪き、おのゝ光まで
向ハシ——と云ふ頃て僧のれれと招き、新法
せ——と云ふ、驥なり——然る——三月十日飯沼
弘經寺に所化祐天同侶ニ三人倡い、来りて、
すふ——件の——とて、あるを同教り
數遍念仏——とて、若と問へハ、怨要今よそハ胸乃
上り君て、——とて、今ハ思ふ、君て我手と

放し、——とて、祐天名号と書、四方の柱に張て、一向
了念仏とて、すふ——とて、怨要胸をおさへて唱
へ、——とて、強く、——とて、三三べん
唱、——とて、了念を授ち、平て、——とて、問へハ
よと放ち、退く、又十念とれと、——とて、退て、西の定了
ひ、——とて、君と又十念とれと、何とて、——とて、了
又、——とて、了念とて、すふ——とて、了念とて、すふ
五、——とて、了念——とて、あり、——とて、了念とて、すふ
——とて、了念とて、すふ——とて、了念とて、すふ

慕いなるうへをゆく先ゆへへれうて念仏を
とておろ珠數とて入てあへて帰るなり聖日
又まゝいゝとていゝふへに獄極果とてあへて
又ゆへぬ極果の門あへて悟れりて此方より
うへ固く都へいゝぬとて悟珠數とて入て我
名や妙樂とていゝぬりて又累の門外へていゝ
定業まゝぬへぬりていゝぬのまへに掩ひて
うへに獄たるをいゝてまゝにき、我々のいゝぬ
うへにいゝて白き途へて累のうへにまゝと

おへに夢乃ちぬりていゝぬりていゝぬのまへに
へ珠數とていゝぬとていゝぬのまへに珠數
とていゝぬとていゝぬのまへに珠數とていゝ
不生妙樂と名づけて一夜念仏とて絹川の辺
石塔とていゝぬとていゝぬのまへに石塔
俄にうへにいゝぬのまへにいゝぬのまへに
いゝぬとていゝぬのまへにいゝぬのまへに
いゝぬとていゝぬのまへにいゝぬのまへに
いゝぬとていゝぬのまへにいゝぬのまへに
いゝぬとていゝぬのまへにいゝぬのまへに

左の者にてハナハ助ト云者なり慶長の中
了絹川了て沈め教さるゝ一かひい累が性
物セーゆとふく思ひてまゐりてしつ
村の老翁いゝくをさゝ累る兄なりとれ者の母
助で地ふして産ふ家ね時ふのおろ嫁まね
に継父助は生れなりきといふて佐ふ育ハ
せりや一向に云い母ふのお醒く生ま
我ふりふきふふ誰人スナういひん
て絹川了つまひて沈め沈め教さるゝ一かひい
後

川乃流るゝよて西の夕暮りやうハふ亡業の童と
スノ人多かりハけ助が亡業なうん祐天なり
すめをそ十念と授ふ菊も助うとそハ菊也と
よ助は所をハかりに看るとり頃て單到
直入とは名書いひくは檀了りてせられハ
茶指びりてあきくあ助が檀へり
ハハかりのくも雲烟のやうに雅き者の形や
るゝにわくハ忽ち光明やうて家内を照
くちりよあも甚く情邪戡罪しき

せいに西入と改姓し一單直了念佛一矢室四年
亡月廿三日了終了七日あつたを以て
て称号にこそ大聖相拜せしむるなり
して往生せしむるなり

妖鬼頭を抱て念佛往生す

常州松原村乃あるなりと百姓の妻ハ美女に
て夫婦れ中もねるむいなりしなり
妻病て死すべきにけり我出あつて後妻を
かくしむる何系なりと云ふ人と言て誓互に

候と云ふなり口説はのふはかりしは月日
を去て代友なりと妻をてハなりと云ふなり
るなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
それなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
抱きけきなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
粧ひえも云ふなりと云ふなりと云ふなり
てしなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
し大般若と云ふなりと云ふなりと云ふなり
りなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

足とはぬぐ念仏して母聖瑞て夢る

下總国田郡羽丹は村乃庄なるといふ者のみめ希ハ
一心不乱の念仏——常く足とはぬぐて歩てい成
るべくといふ若くはまゝ、虫など踏殺んるやと
おもはるゝくハする也又案の板丹花日之婦に自れ
て弘經寺祐天和尚の許へまゐりて十念と受名号
ていひ来て帰る其夜より熱病に——出に若くは
るすしといふ唯一句の念仏——父母も側
乃人をも勸めて勤まをり、寅月十日に母が

夢る異香四方より薫り花空に降西乃方より白
装束——人舟といふまゝ、黄の装束、母
偈多きよとて船よりぬきぬい——母を心にいそ
弘誓の船より人舟といふまゝ、黄の装束、母
——く見居る人音不空とてこへて
あまめぬぬみ希ハ本はあらうが——とていふく
念仏——ありて翌日又念仏して往生せしむる

幼女呪といひ佛名とていふ

阿州阿波郡板原聖幢寺乃家来利助がひま

三業乃極身方了母に抱くれ居て光明真言
二三十遍隨求陀羅尼二三十遍念仏二三十遍唱て
後母が氣くびとくく天へつぐくく三度
りりく寐入ぐくくに息くくくに美香家内
薫ぐくくあり延室ハ乃乃あり
ハ業乃童子咒とすて念仏す
大坂道頓堀竹田迄くくく芝居乃笛吹半と云
ふハ業ありしが痺と云ひらひ此處に弱王たの
りくありし時親ほくくくに依て真言宗なれ

バ光明真言と云ふありのふつ居てせし
はり遠くと云てとて念仏十遍を唱
へて目とくく地なりしと云

白子の宗西終る際と遺語

勢州白子のハ助ハ有福の者として信も心なと
仁怒ありて極めく後世福びひかりありて芽
了世とゆづり法体くく宗西と号し怒り
とて抹香とくくく人との信心のくくく窺ひ
念仏とすめりりりりり隣の妻不品と云ふて

通例のちちりしが兼て灰でまゝ一後朋友
 れを悉くいそぬゝ人々歩き灰の三日まゝよう
 日未だのもし大樹寺々々きて本堂の弥陀の
 まゝろろ聖会堂一全仏間々々眠がゝゝに
 息まゝけりしてまゝの信者群々生々のやうと
 まゝ人々々々七日が灰骸と群々々々々々
 虚空一々々々々々々々々々夜ハ龍灯々々々々て
 堂内一々々々々々々々々々人々々々々々々々々々

大いなる黒おろしより専修の念仏者なりといふ
虚空より小き佛と拜じま月方多くに丈像を
拜まさせしむるはけりや百萬返の万霊和尚告
りれども方外ありて相うへて人として制
しむるあるところありし心地なりと
云一が聖聚来迎王やくも眼あゝ拜一なる
て人として告大徳生で遂行

江戸通町中橋又宇樹といふ者煩ふる所じ

寛文七年二月七日一族の面くして河内にて我
 昨日終つて異處に去つて終つて念ひに
 いふにして駕をりておの寺中の法忍坊が菴
 に入つて珂山和尚と招き十念を授けられ八日
 まで今日も彼岸なり我々彼岸にあり
 ぞと戯れなり

かの岸より
 要まはるく
 海より
 しし
 念仏あり
 念ふに
 おりぬ

高詮衣と掩ふ

土佐高知乃塚下水町地原と云ふ者廿二歳
延宝ニモ乃其のころと云ふ一病一ぢ七十九は
ろ親とむいひも来勘當一より一弟と許し
きぬれこれの最期の願を連枝ハ本同根に
て中りくても冥途のわらわらんとはせ
るげう三十一は親の妙なる志と感ドありや
堅く執めても一弟とむいびど一ちれを病人
へかりすころこゝ孟移んころこそまかり一我はひと
すききくろく東比と一番音曲ふかりく謡ひそ

後人の歩面ハスにくらきめうと衣ひきあひ念
仏數聲——悲——マモ

和易順西田と江——西にいふ

和明新在る日の目切の基七とり者ハ了乃
ふ——律義ありし——千葉の比妻ハ跡に五十
余葉の母とらふい字多郡茂地村の伯系乃
悲ちあが山の端とつらまふ葉の庵とし——西向
る戸ロとぬり——隣郷の以村乃本誓和尚と
まの——母もとも孤髪——母ハ妙意自今ハ順

西——号——一心不乱と念仏セ——順西庭と云し
ハ我ハ八月十五日——江生と遠る——つし
果——ハ十一葉の八月十五日と門の戸口に腰
て西とむい——うきまふとみ体とゆすけと念仏
し午の刻と——縁後——つし

恒式とたがふ

大坂天徳の典系町と秋岸とと禪門つし
きつめて直つし人——千二葉貞享四年六
月——あふらむとむの——子と悦みあて

京祇園町一理西へきつゝ信者より誓願
 事より日参しつゝ四十二回あり暴風供ふ
 日一とも更へたてゝ天和二の九月
 夕ぐず睡通るれども此のきゝじりく十七日
 月よりあきくつめ我はゆほ日遊せん
 二夜三日の別付はめ預りれとて自ら願ふ
 文と誦しつゝ念仏し十九日辰乃卯
 息くゆぬき十四夜あり
 町々蓮臺と擁す

江戸日本橋二町目乃玄燈や七多ありとよ者の母
 純ハの素の任なりし元禄十二の十月廿三日
 了齋の座より昨なび画る素達の像とて
 我ハ下品乃に生るる所とてゆきとて念仏
 數十遍とて観音の蓮臺とていゝとて夢
 して息くゆぬ

生鬼寺に詣す

武州熊谷よりきとて玄燈の御披露の檀那坂田
 志と来久と煩ひて寺よりもとてく入る

美しき聖母元祖ニおまかせ
 けりしうきうきとて嬉し
 けりし頃てのうきうきと云
 うきうきとてサバの乳母
 の懐に抱かれぬおに
 て燈明のうきうきとて
 けりしうきうきとて

知遷和尚愿聖問答

常州飯沼弘經寺の主人知遷和尚甚ういひ

来る知遷吃してそ何をも法師のてく我
 汝が智恵する所こそ不他と捨下の不他のも
 念する怨敵をばこそ観てぬき計りか何知遷
 下にも喋す一に法性本清妄念依何来る
 法師曰法性本清依此心獨来る知遷清濁俱本
 無也法師曰法性本無也當無風波起知遷法
 性不論起滅よくいなり法師閉口一法矢ぬ
 それこそ知遷いさぎよく成る我法行上なり
 強位の像ありむい結加伎望一念仏のて

此室三の月才旨了大住持てさあしりし
別雲三層堂のうろし種色乃花う異
香にあり薫ぐある傍依き勢舉て拜し
まうあるとや

茶室のききみ西のつる来迎て拜す

大坂松屋町通り瓦町三丁目末松の住まふ
権く助七郎元禄五の年夏よりまおしりし
木日此相父家職了りしとて病人森りし
今日ハ客了りしとて頻りしとてしに何と

左ハ云ぞしつるハ西のつる今日此ハ成する也とみ本
長病のよりれどもいさ死すべきゆふもるし
しかどりし西のつるき高しゆりし午の刻に
夕飯いそしめし我姓全ちしとて仏おる香
花をぬく親兄弟入じしとて念仏を
しつる進み来りしとて我ハるきとて西のつる
もくろ如来にむしりしとてあつとて因言
り念仏しつる進みとてあつし
壯婦内の方より聖衆と拜す

大坂田案掾一町目に相傳師娘すま案より
京越縁解一聖元治四年に解より遠解
一々本復一づく一々一々一乃出あや
ははき一々すしも後世の當りてやに
十月れ一々去る知識のすく一々念に
懈怠りしてお月二日父と母に同く令
てみふふな聖衆并にちてわい悔えし
あふまや一々念に願以此功
徳の文と唱へて令せ悔伏ふ成て息くけりし

如來降臨一々い勢至摩頂一々

阿州徳嶋通町一町目い々長素が娘い一々
優一々や一々一々孝行あ一々
お魔のけ一々一々今に
ま一々一人一々一々一々一々
只父母の老て後世の心があるも一々
はあ一々飽きて貪著一々我慢耶欲の暗
あ一々一々一々一々一々一々一々
了菩提取の愚國寺の主と拓き十念祈ん一々

授^ふう二親^{ふたご}と夫^{おとこ}と娘^{むすめ}の十念^{じゅうねん}でも又^{また}家^{いへ}親^{おや}の夫^{おとこ}と
うハミい^{うハミい}やう十念^{じゅうねん}で授^ふう親^{おや}とくいとぬうり
ワ今^{いま}今日^{けふ}までううとるうくも西方^{さいほう}の如^{ごと}来^{らい}ふあ
うとつとるうとせぬい勢^{せい}正^{せい}井^い号^{ごう}と摩^ま
させぬいぬ病^{びやう}苦^くうとしもとるするふじしやと
念^{ねん}仏^{ぶつ}三^{さん}昧^{まい}うううう平^{へい}五^ご来^{らい}うううう收^{しゅう}生^{じやう}うううう
しやうう

奥^{おく}賣^う九^く糸^い西^{さい}う倒^{たふ}き卒^{そつ}う

奥^{おく}州^{しゅう}壯^{さう}唐^{たう}郡^{ぐん}小^{せう}竹^{ちく}侯^{こう}の奥^{おく}賣^う九^く糸^いハ津^つ義^ぎ茅^{まう}

一^{いち}の者^{もの}りれむ人^{ひと}と本^{ほん}と監^{かん}ハ松^{しょう}寫^{しやう}ハ高^{かう}賣^うにをし
ちり^{ちり}ううて日^に中^{ちゆう}のほめ念^{ねん}仏^{ぶつ}う^うて^てそのるに
條^{じょう}の賣^う人^{ひと}もあらじあへて損^{そん}でやうう
ううううれむ是^{これ}と面^{めん}目^めううううにういほに
まう二三^{二三}ううて大^{だい}うう敲^{くわ}き鐘^{しゆう}と二^に面^{めん}ううう
たのう大^{だい}ううの損^{そん}と掛^かううう又^{また}まううの思^し
報^{ほう}う鐘^{しゆう}とすうううんはうも念^{ねん}仏^{ぶつ}ううう
うううう自^{みづか}ハ奥^{おく}ううううう行^{ぎやう}任^{にん}生^{じやう}所^{しよ}稱^{しやう}名^な
たううううううううううううううううううう

了きうさうとて越後の友家とほりてそれう
程ちうき川了て水とあびあて信め念仏し
曉し言しその日の午の刻ころに
死ちつてありにやとて門了出空と詠め内に
入り我生をせし西の方了倒きをんとして
了念仏し鐘とてし了木身に了念表へ
云に遠りて西了倒き生をせしとて

佐久間の竹黄金宮了生に

江戸大傳馬町佐久君勲無由とつていふ下女竹

天性仁慈乃志かくてゆた乃較我は念人
了りてとてそのあはれなり暇のふいふに又ハ
流しの隅了網とあて置きのまはりし由食し
はの了口了返りて社名しとてあり何所頓死
せしにても温まりしは表やしとて人こころに
うりて遠く獲生しとていふ冥途のふいふ問
はされとてくともなり廣野と生し黄金乃
宮殿あり佛はしとてこれハ海がまろ其まろ
とてうりてとてありぬるのち念仏しとて

して大に生でるを——き乃るの湯ふと詣て
竹と逢う竹が口和、安養世界に候なりし
あゝもあゝの念ふ——又地とあゝ心づ
やうやう云てうや——や竹は○之網とあそ
流——い今場と寺念仏堂の先院の門の天井に
やあまうあり

二通和尚は座入滅

常明伝連常福寺二通和尚ハ寛文八年四月十七日
つ安君の法門還思癡乃筆題して扱ひうて

大衆了向て十念と授ち直々眼とそちを
いけうまも時うけまぬまハコハいふとと主あて
えぬいすう了合掌のよと乱まづ結加乃足
もやぐれず——安然と——入寂——あいま

毫光堂より

洛陽西園寺玉誉和尚ハ平生自利利院——念
佛懈怠なりしに病中乃内本堂の内あきりに
光の赫奕うけしに怪——とけしうやいふ
やう乃法院仏のお像なりとれ白毫うき教うけ

光りいそむけりあり堂の内外も光はるゝぬ
まは遠目るゝ火るゝ乃ぬ又入て皆く
うまうの海は内和るゝして終て光るゝ
佛光も時るゝもなりしてらんそぬ光河合松
う帰るゝもなり

遺骨念珠の舍利と云ふ

三縁の増上寺の學上人ハ寛永十一年四月廿日
念仏三昧よりして終て一より華嚴の後身
骨悉く舍利と云ふに掛るゝもなり水移るゝ

珠數五色瑩然としてけり又舍利と云ふ

預め蓮臺より異香室より薫す

如幻律師ハ横州佐吉の杖田に丘の上足るゝ
病より侵るゝあれど大坂上尾町義雲軒と云ふ
菴より保養せり延宝六年霜月十五日乃
曉天弥陀尊眼前より事なりぬひくぬるゝ願
るゝハ後日より成就をも則ち此の蓮花ハ女が託生
の臺よりとて指さるゝなり條より初喜強
盛りしてゝ名の如きゝに念仏よりあり同慶寺

て問あれむと云く〜と云ふ言もけりやと云
へ〜矣者室内より薫〜ありと云ふ十七日に就て
合掌稱名〜して〜と云く〜氣にぬ平生少
欲知足〜して觀施〜とも云ふ内少〜と云
のとして奈ハ〜と云く〜

念仏法師三〜い好相と感す

證誓念信ハ〜との取の人〜と云く〜と云く〜
青月十日未の破〜と云く〜に先〜と云く〜母と云く〜と
い〜我ハ今上〜と云く〜念信〜と云く〜はも〜と云く〜

菩薩の〜と云く〜と云く〜に〜と云く〜は〜と云く〜
け〜と云く〜菩薩の西相拜〜と云く〜と云く〜と云く〜
忽悲〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜
玉の指〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜
蓮花四〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜
誰〜と云く〜三人〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜
誰〜と云く〜十二日又〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜
西天〜と云く〜白雲〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜
村〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜
忽ち〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く〜

土よりぬきおろし菩薩がく元海す中に
大蓮臺よりて佛いほさずけり向うんとおろし
内へ忽ち文余りの坐像の如來金色のいろを
放て行者の身で照しゆる即頭てふれて拜
なり不る如來よりくの菩薩よりけりて
空を我の法向てさきより所謂空を我とい
但信乃稱名これと法法にわけて菩薩衆
了告ふぬくやまのりあまの行者より結縁
その中諸乃菩薩念信了りいひてやふしや

半日をくして爰にぬ回く七日のほどはさきより
けりしとて目あり白燕四流菴室の窓の相
了りて半時よりが同窓目も開目より
乃より又其室内に薫すけり八月二日
光明遍照の文と唱へ念修せし人より
来迎くといひ告て微笑しおろしき

利春法師友より叶て即往

勢州島羽土井因防より吾提取し利春より
傍より日來信公堅固の念に者了りてけり

あり何より痛らるるまゝいふ所のを秘蔵する者
るもろくばりしおののまゝやうもん相おれ
西くくちて我ハ頼て力ぬるなりいふ
まゝいふと云ふまゝ幸へぬくやのまゝおた
今注生丁として日中に堂より瑞雲金堂し
き声了念仏一あり人と不審くおし
後了死て回春にすじぬせんくし声弱
て眠ぐぐに注生一あり

骨舍利と化し灰山五色く書す

摺州東成郡放出し出田寺の空山和尚ハ道德い
しと人よく敬依せり往生のお二三日が経た
人の所了てよく歩きぬり帰て快くい
それ曉天了僕とれこくみく妙水とワす
我ハ今日注生丁のなりとておた佛おと莊嚴
し香花燈相とせり徐うたり水くぬ
僕了りて今注の念仏と細りてぬし
ありて助喜せり若くは弱りともぬき声了
まゝいふべし回向の文たりなば十念と授かんぬ

了るべしと發願文と誦
光明遍照の偈と
以此功德此文と誦
了るべしと息とぬ火葬乃滋養ハ舍利
なり天ハ望也
世壽七十歳と云

夢中に二つハ聖告と蒙る

濃州海西郡小原村
今日往來と遠るなり
靈夢と云ふりし
こゝに聖の示す
所告なりと云ふ
信心と云ふ
三日の夜
入夢乃告と云ふ
しす日

八月十五夜
今日往來と遠るなり
靈夢と云ふりし
こゝに聖の示す
所告なりと云ふ
信心と云ふ
三日の夜
入夢乃告と云ふ
しす日

此の海より日暮はあけ日暮て死ねるや知らん
日ひとやうそ自ら南無と阿彌とをよみて
心安しし僧をいふ人も呼ばぬ少時あるむ
て海よりし回るる念仏を頻て四回を
かきとくするまがや等歌の声すやんぞや
乃飛又ゆるぎやうきもあつて筆を
おろしあつて三十八年ほど経てり

可軟和尚茶毘智郁

江州錦織寺可軟和尚ハもや靈巖寺の九

ちりし法をいふ等るはしり多し
あつた人上告ていづく新丁六の末より
よりを著しあけ成然してはしり
華の肉真実すしもちるはるる
候とれりす願として念仏懈怠りして
きある茶毘の付伴の詞すしり
しぬちでりも香のしして迷骨も
とありせり

慈愛信女聖相現前

妙成ハ伊賀の玉上座の何人山岸岩と物とよ武士
の女と少もの時ととも無難の心取とさう天
にいて人のよき落とるがやうと一生諍
てあつた唯貪者とみれとて乞食とていひ
するのやう下人ミサレといふん小狼
たりよりやして能く飯のたぐひを後の下に
もてゐる乃日雪の朝とてハてて施とさうねん
たう稱名專一にして佛の目あら出現とさひ
又淨土乃七宝莊嚴乃具照カヤきて親とさう

たしとびく感見す行年八十六寛文二の正月先づ
臥し西として念ふに往生とさう

壇通和尚遺骨舍利

かゝる光り寺壇通和尚令終とたうい大衆とあつ
き我々も終つて回青了金鉢をのちてつしふ
數百人の多徒とて湯とさうとる息たつ
せりふ山上りて火葬せしに異香自然ふきま
りては骨とさうく舍利とさう念ふとさう
ふく粒とさう光と散ちとさう病中にあつ

祐天和尚祈禱堂ノ範ヲ模倣セといはれらるに
 昨日と強ク何の事ナシモ云々あれども云々
 云々もいなりひつきかやくふふ云々
 昨日天白日の内道場に入り雨なりし也

屋上紫雲以裏舍利

江州 彦根 田常寺 實譽上人 十年ぶりの病より
 て寛永十九年の八月十三日より一週間 係強ハ十五日と
 して 病のしるし 今今日より 病のしるし 今今日より
 病のしるし 今今日より 病のしるし 今今日より

駿^{うま}々々 焚^{かん}葬^{そう}の^の後^{のち}速^{すみ}灰^{はい}々々 舍利^{せり}々々 也^え
 々々 ぬ^ぬの^の内^{うち}々々 々々 仏^{ぶつ}殿^{でん}の^の上^{うへ}々々 紫雲^{しうん}雲^{うん}

父母の傍相を告

棹梨一雪う父幸温ハ寛永十七の四月廿の日に歿す
 しめ妻の妙安嫡子成田清岡甚だ憂ふがみ
 中陰了らば父ゆゑにまじゆ達しく嘆すなりき
 我ハ貴くも安養了りてぬ歎しくもなりなん
 これ又よとて袖とひもぐへるゝに願ふの故り
 又くしが何となく光りかすきて黄金の如くに雲

幼女遺骨跡疏合掌

江戸日本橋大町乃金持惣と申す者の娘二女乃
 一はより佛よりい念仏をうけ宗家として母にあられ
 ちるが細難なるものなり誰かゆりてなきに母の
 今日よりハるる比佛前より香花を焼へしんあらず
 念仏してあり之業の元禄十二年十一月三日なり
 怪しむるものなりと云ふことありき日々にねま
 りてオニ身廿日の末父よりいぬはけ曉候下
 る也二階の如來よりいぬへ送りしやといへ父
 顔色のかりりとて頃て尊像よりいぬへ

うけしきふし新しき念仏唱へつてお日のあかり
を偲ふしきつくはるる偲ふを伏せしおのれ
急ぐゆめやれうと寺に送り火葬せし
骨佛額しはる長二寸をうけておれ見の蹲
居せんに似て片足と立て脇で張てよと合せし
所らぎ路跡合掌の相とにけし故口の華
握所より遠州浅松法林寺に贈るゆりし
蘇生して冥途の舍利と持来す
丹波丹井郡鹽田村の山内盛徳といふ者ハ二

の念仏者として仁慈第一の者なりし元禄二の梅
卯日了て千をもちて方海にけしおのれ蘇生し
我冥途してまじきるたけけ佛舍利以て
せしそ左の掌の中に光明赫燦と一粒と握
居し村人奇異の結縁とて群集し念仏し
三日の午の刻にけしに修終念念と大往生
候し没後し件の舍利おれとやと秘藏
ふしはるるえくゆりい人おしけられふにや

川崎教俊高曲終と

江州栗太郡磯石村一川次教後とて武藝を好む人
ありと痛く老ても尚後世乃いづるをうづーが
成身乃子と失てとめて世のをたてうとてふ
以何生外一向專修の念以者とつぬ八十歳
延宝三年極月廿三日子家頼とすび我唄ハ
世とまろく例ハ廿七日小餅とほししと唄日
月せうやと云付て廿四日一族を招き召人うら
人食座一紙今日世とけしとくを難の
孟さんやと數献とていり老る者一曲と

しめとて高うう

唱ふまハ佛も我も二つありある世の法陀仏の
至誠心深心回向發願の聲は耳に傳てもわや
ぬとにぬらりけり一十聲一聲數けを惜も
肉ふても迷へまふとてわやぐき
や誰い佛とて佛といひ合掌し教延念仏
沙才了聲とてうへて酉の刻と眠る
あやとけり

大坂の專西法流とて終とて

大坂阿波生伊達町久宝寺屋敷西ハ齡ハ年七歳
まで無病ありて本願寺日参せし一向の信者に
てありし貞享二年九月十六日小秋極霜清乃
月臺せし時地筋りて十徳とて此の妻り
十八日一念仏なりし夜中死す招きいじき
後世也とてして知死して問時あるまじき
我生けりと思ふとてありと云ふと云ふ
とて死すなりと云ふ

新著聞集

殃禍篇第十四

慳貪老婆火車廻る

妙嚴寺の僧馬とる

日蓮学僧活なり天狗とる

邪見の鰥母不孝二娘

慳貪富人成し他報とる

犬とる現報

人とるしとて斬る

憍慢の織屋機糸截

嘆火冬とる

慳貪夫婦とる犬とて吠

非道姪暴親と夫婦

劫盜遠く去て還る門とてけ

鶏乃毛ひる生す

頭より鳥乃嘴と生す

級生の現業無根乃取とる

楊枝咽よりくもちる灰す

貪嫉諦りて救て却て灰す

犬少久古器て娘とる報す

逆風家入貪嫉首とるし

賊夫鬼とるけりて首とぬく

産婦恩とるも熊のみく害とる

梅岩玄素の積悪

机の耳口とるきり根闕のみとる

厚のね毛とぬきとるきとる

野分三竹口毒とる害に

洛陽の東に洛陽の寺あり上人あり
の人よりて門来りも上人分の聖ありし師
煩て遷化をせむべし——比より何となく
れあつておすごとく看る所の如く何となく
しみ不潔とせむなりとて條をせしめて四
えとて眼をやすむなり——鼻をくちり
ぬぐひて圍より走り出て裸になつて
しむの如意を藏りて飛りてあつて
——衆の上人よりて宗をせむなり——

洛陽の東に洛陽の寺あり上人あり
の人よりて門来りも上人分の聖ありし師
煩て遷化をせむべし——比より何となく
れあつておすごとく看る所の如く何となく
しみ不潔とせむなりとて條をせしめて四
えとて眼をやすむなり——鼻をくちり
ぬぐひて圍より走り出て裸になつて
しむの如意を藏りて飛りてあつて
——衆の上人よりて宗をせむなり——

邦見の鰥母不孝の二娘

武州板橋より一里ありて西戸田村に鰥の妻
ありて人よりて婦ハ大衆ありて婦ハ
妹ハ十八歳ありて山保に女ありて妹ハ
妹ハ十八歳ありて山保に女ありて妹ハ

んくはあ擲——多所うとて帳の内に
を寝し——天娥又あきうり大面こ
きうに津雷おとあまの女やつとあき
うあきあゆえうぐうおそれやで
婦も不孝うて朝夕食物もゆまに喰せ
はくうしと聲あうとて下人ハ踊り
出く書めゆとてうよとて走——とれ
姑うゆりせ——母候し喰きへ娘帰る
又て憎きううとて走りやく王奪とる

あらしう母ハ煩ひ居あつて候く新々う
くひおみ戸とあて投——聲あきうて候
ておみうんとてうあへ娘何とてあきとて
あきうとてあきうて候くし母ハあき
してあきく傳言せ——うばあきうとて
あきうとてあきうて候くし母ハあき
あき母ハ則あき娘もあきく失せし是
聖貪富人あきく蛇報とてく

養生下野等々家来堀へ是はの助と
夢匠の市ありと云合せ人の秘蔵し
犬と報しとくしりし二日めより飯と場に
何あてくといふと竈の下に寝ては来の人
何とバ大れと云くやとあつ助と来ハ決
了れ死すしとありと云あ、全く新清
しと後はまゝしとくしりし

人を報しとくしりしと云あ、全く新清

京大まゝ中堂まゝしと云傾城町ら何あめ

者やんは切しと云あつとあつ十四日丹
乃藤山しとくしりしと云あつ乃藤山と云し
中よりある人新刀ハまゝありしに京のまゝに
あつ乃男と云くしと云あつ乃男と云くし
しと云あつ乃男と云くしと云あつ乃男と云くし
すしと云あつ乃男と云くしと云あつ乃男と云くし
しと云あつ乃男と云くしと云あつ乃男と云くし

橋慢の織屋様系断截

京大まゝ下立賣下ル町丹後ヤ佐来しと云者

絹屋^{きぬや}へしりしむのてきぬや仲^なるう
に^{きん}絹^{きん}うさぬきく内^{うち}決^{けつ}するや仲^なる
す座^{くら}て丹^に後^ごう人^{ひと}やほりーあ令^{あきん}でうー
あで買^かりよりんむ仲^なる乃^の者^{もの}も却^{かへ}て仲^なる
う通^{とほ}うきもせしういしそお比^ひ佐^さまの
うハ機^は三千四^{せんしよ}しちりり多^{おほ}時^{とき}機^はの多^{おほ}老^{らう}と鶴^{はつ}
と角^{かく}がきうその聖^{せい}朝^{てう}う一^い機^はの多^{おほ}い
切^きう誰^{たれ}うきお業^{わざ}とく事^{こと}議^ぎしちれ大^{だい}文^{ぶん}
證^{しやう}松^{しょう}もりてい^いのうき毎日^{まいにち}く切^きう

後^{のち}うハ廿四^{にじよ}機^は切^きううハ松^{しょう}が時^{とき}うき日^{にち}達^{たつ}字^じ
の上^{のうへ}人^{ひと}事^{こと}りてさうーと新^{しん}續^{じよ}ーちれ先^{せん}何^{なに}の漢^{かん}
そちうきーや何^{なん}新^{しん}ハ天^{てん}々^{ざう}さうきやうきー
そて因^{いん}由^{ゆう}業^{わざ}師^しの移^{うつ}居^きとまのて七日^{にち}加^か持^ぢー
ちれバ件^{けん}の切^きううきぬぬ八^{はち}日^{にち}ーと新^{しん}續^{じよ}終^{しよ}
ちんバ又^{また}切^きうきぬぬ人^{ひと}のいさく今^{いま}夜^よの終^{しよ}
やちうき皆^{みな}嬌^{きやう}慢^{まん}のひさううき災^{わざい}のうき
ちれ初^{はつ}の鶴^{はつ}の事^{こと}ーも思^{おも}うきうき愛^{あい}宕^{たう}佐^さ佐^さ
知^ちるーとるーは亥^{がい}むのうきやうき

婦子みゑを総母め一の家よりあつたお母
 愛宕山より百味をとらへて月まで下るき
 一と願せ——うと哭るへまをまじやに
 ちり

嘆いん火くわ
 炎えんとら
 いふ

大坂天海平目りあやまを、八日（いっしゅう）夜に逃去（にげぞう）
あてて、嗔恚（しんぎ）強盜（きやうとう）の者なり人知（ひとし）らず
下人をせむはふみハ獄卒（ごくそく）のみとありしは是は
そのもの名（な）実名（じつな）也山根（さんね）美（み）より一（いち）人（にん）
貞享（けいきやう）

三日月すくく不具家内力於や多りしに在
 上はるるをれよまのひの外なるを
 けりまひなりきうへ下人先穿張りて
 るものくはてきりおみ人並や
 けりもやうくと人のりりて
 けりもやうくと人のりりて

喰^く夫^ふ帰^{かへ}
る^りの^のお^おく^くて^て

南都の三条くいにて
字を兼て有福のほ屋
あり支那おとりに
煙食政迄ありともいひ

なつし眞享三には丹新旬う旅僧まりて盗
せむしとやうなきむらうれハ一日の内に
四びまりまりしやど一度のいふもせり
既又言ふわろひーう一夜の晴さるる
！ふのわうと書くもけうふて遂に遠や
し旅僧ちあうてちーふやぶ着ハ一町
ぶり隔てはーせんが許みて家なりしは
此者ハ後世のいふにーしとて頓て修業ーて
死はの焼うふとゆふーと後のいふくは家の

人の兄なりし夫婦ハ故通を慟の者うとりり
今畜するうわらゆしとてまは焼けてしまれ
る勢をーりれど不意くおのひなバりて
しくつまハ焼やどてちーとてうもなかり
まふと由なき旅僧乃物持て驚顛せー
はふやまおれど今一庭りて見うて強う云わ
るうとびあひーふ又ちーと不思議や夫婦
うとて言舌通ぜずーてまふ大の吠る声
あふ海ーまふとてちー焼たどるきとてに

ハ何代へもつれりん 跡ももつれり
遠近の人々もつれり 毎夜門より来るかのとて
つれりしとらん

非道姪暴親子夫婦

大坂上町の市々町々 強家の女房しつる寺の
隠居しつる僧りし 運儀しつて波し親に
つれて夫婦とつりし 強家が知る 娘に告ぐ
てつりし 容儀まごひつりし うばふりやいの
継父はぞうりし 一さく 云つてつりし 娘は

親と名のけし人知る亭まにあまる古入屋人
地の事をさうとさう 親し心憂れとて取もつ
つりしおそれ家の借屋に空月とてふ心者の
しよとくくせつり 親のつりつてつり
つりのつりつてつり 家とまのきつり
もつりつと云かり 最後の上三郎マといふ
者をつりつてつり 継父といふとてつり 訴へ
つりつとつり 親の不義はつりつてつり
つてつり 空月ハ出家の不義女ハ出家と

おやせー 科ねぐまをうて 夫婦ふり首と削
りき道頓堀の千日寺のあふ晒さうと見物
乃中うまねと美女うま口と吸金一と云ふ
あふ食とも吸すべーと何と云ひーが頓て
やの者やめて公儀了出ーれで則籠
金セーまうやい吉が亥父も出家してかくし
女と出来る娘う空胸も親ハ出家して
何しと他面とに互乃因果の初ねと海
るふ何と下ヤと人と忌ゆー

劫盗遠く去遠く刑罰のまじ

元録元より京三條河原洗地は都築惣業の
の洗地を換并へ給ふなりと云ふ
以てトく穿誹ありあるを給ハ質やにわ
るるハ三業ある少僧の装束して仔細め
の者洗入はまう質入をくれやと云ふ
月代の代かーと云ふ何れ人ハ何れ者
ずんあうと云ふ云ふ云ふと云ふ
金セー何れに何れ人の都府に發一法

先づかゝて越おのゐるて山賊よりうきなり
けり我ハ悪性ゆく親の勘もうて身の上
なまゆへしとておれせりあの上はくこの同類
るへいふりていふ盗賊も細得しておれ
るバ我館をて誅ひるなりお面くおれ
むらゝとすなりお中に一人我去の京より
公儀の鉄炮とぬすに日本あゝの強盗とぬす
これ等のお堀ハ金よりおれとて自慢せり
あふ日の後道に者いひくおれとて京へ

のお堀ハおれとていひく我ハのやうていひる人
左もわゝるおれもわゝるんいうやうに
バははははははははははははははははは
右のどんく討へしは斜りて人腹に
きぬい越およめをていひるおれ
黨ハ越およて宰しは鉄炮望ハ京に
成敗せりきあはははははははははははは
わいしとていひる

鶏の毛尻より

其の西蔵村の土屋を以て其の形を以て
好く喰ひて其の味を以て其の味を以て
産毛一面より一寛文の以て

此の鳥の嘴を以て

江戸通銀町二町目一丸町より高野あり
八王の山家の餅拾のふと其の味を以て其の味を以て
くち大獎病でして其の味を以て其の味を以て
して其の味を以て其の味を以て其の味を以て
のりより其の味を以て其の味を以て其の味を以て

よて其の味を以て其の味を以て其の味を以て

穀生の現業金根の形を以て

上総國廳南乃妙覺寺門におり人数は以て

るりしと或百姓十人より其の味を以て

書きしと其の味を以て其の味を以て其の味を以て

其の味を以て其の味を以て其の味を以て其の味を以て

其の味を以て其の味を以て其の味を以て其の味を以て

其の味を以て其の味を以て其の味を以て其の味を以て

其の味を以て其の味を以て其の味を以て其の味を以て

えん某が父了て所し若き内之鳥せり
細せりまほゆり殺せりやう教めや候
煩ひがく候ふ也喰とせんとて粥を食
せりがられむ鳥れ唄いけりり出て候
啼
了とて喰いありとあり

楊枝咽入りまゝもちあす

寛文七より越おれり新喜みありとあり或
朝の水けりとして楊枝を舌とくまゝ
しりりり楊枝咽入り終て候なり

けんはつと臭泊りし御とびてまゝもあつて
御河せりりまゝりり新喜みと煉磨り
多りの臭の咽りけりり新喜みと果てり
の終りやまゝりりてあつて候なり

貪嫉締りて放て却て候す

寛文元年は八町堀りり新喜みの醫師
素とひりりり媒の虚言りりやまゝん
の女ありりり女隣の妹とありりり
れりりりりり親のまゝりりりり

いふは首てくきて刻みん我刻すくハ女箱ヲ
今より二十ぬりうこれとまうすも又龍のうも
活てらうず教てぶとりハ焼初めハハ龍
ひまづの邦のより合もくおとすくすまゆく
しお金のうもゆつてそれなりふぢひん定あふ
ぶ教アふもて天并ふも縄とるが挿とる
やもてやうくくはまのやと仕飛と一あふ
挿とるくくくざくとはがまじしうあ女
ねらうも声とまあれハふふ合頃て縄とまう

あれハ焼ハ息くハ焼ぶふ大款と新てふれ
ともりふふおられむ只堪忍せよと信り
うや頻る新証せくくハ母ハ大款不
の者う合とる龍くハ信りくハ罪
ず活て君ハとぐき信もつてあふれハ力
そのふりれむ科れがまかくくハ百日牢舎
せりハ監所ハ法体と云ふくハ云修
石座のうらうとまく書と親のりやに海
のやとんくくハ信りくハ信り

犬^{いぬ}少^{すく}之^の云^いうや^やありて娘^{むすめ}と^と少^{すく}報^{ほう}す

蓬風家に入貧媛首をくしりて

了りあり老の母ありあるが日暮大級邪見
 の者少くはひふ二井てはひりうた山里の
 窮民のありれむはひのてあつて借での能く
 人はい誰いふむ者もあつてさうに延宝の
 初比ふてありしが老姥に化ありてあつて生
 まてふに家のあつたりあつたりありしめ候し

[illegible]

梅濃吉之丞の積悪

大坂聚楽町之松屋吉と云ふの胡椒屋と
しつゝと嫁を仕立てて親の大政黨より大坂中
のおぢやの代少者の親兄弟と云ふ所の所より
とも能くしつゝ此の邊の方便よりし
丁銀板と云ふ者へおとり子銀より今一度

ちとちと素所へ報してさう隣の者壁の破し
うらうやひもれどお服給の血や何とて外
のお傍ややまこつと公家と云ふと云ふ
云ハぬの外なる事やいふてうな何とて夫婦
ういさう素おろし何とてせると云ふと云ふ
吉と素所の金で奪ひ新地堂給ふ何とて
素所と云ふとて何とて用意せし比少給
第三なるいさう何とて妻と離れしと云ふ
地の女天主寺と云ふとて何とて長吉ハ何と

吉と素所へ報してさう隣の者壁の破し
うらうやひもれどお服給の血や何とて外
のお傍ややまこつと公家と云ふと云ふ
云ハぬの外なる事やいふてうな何とて夫婦
ういさう素おろし何とてせると云ふと云ふ
吉と素所の金で奪ひ新地堂給ふ何とて
素所と云ふとて何とて用意せし比少給
第三なるいさう何とて妻と離れしと云ふ
地の女天主寺と云ふとて何とて長吉ハ何と

是も愛せむありし金の由穿鑿けりしめ交なせ
八十あるなりとて一板科極りて古き糸ハ磔二
やうな條の三人ハ大坂進教けりしめ交なわ
古き教くたれ私うしして新人ありて首を刎
らき——少秋ハ世のち子教——とて磔
やうな——

狐の耳口ときくと根闕の子で産

勢州日永村の古きありとて人者狐とてうへで
昨日の親の忌日なりとて胸ありて産きありとて

者我ふらきとて産て耳と口とをあらして教
しありたの此店三ありて妻産せりて女子の
取きありとて——とて産——寛文十二年の
鴈の羽毛でぬきとて子で産

尾州勢田ちき山崎おの者鴈と産に入
しめ丈他出のわやとて鴈の籠でぬきとて
妻とて憎きやゆとてぬきとて肩骨計
る——とてしめの女産きとて産き——に肩骨ハ
うらなかりとてぬきとて子とて産

野馬三竹口毒多と害す

いづの野馬三竹とて儒醫乃高名世にす
し人わししお悪き癖はて例ぬる者
とすうーのゆふも虚皇毛くまぶたを
あやうぐと敷へてく顔出くえうと
大なる声して叱らまけりし後京都
おのの小姓と仰の悪口少く叱らま
それ者絶えりて即ち三竹とけり
ありて世るへん類はく根絶せり
とて

非理人牛とつひ抵觸せり

京荒神河原の牛屋
牛うひりふけりありに
鹿やとて人いふと彼へ
ゆふべー今一度ゆきて問屋
おてまねうとけり
それと是非あり
ゆき件の帖で
牛大荒い

有りしれども人何とて一もやとてやばしな
まのまゝ牛飛出て人々解ふ引りて実穀
しとてあり

不孝の男士歟尸廟より出る

和州高市郡島や村々甚しく百姓はふ
母と不孝なりしはつと耕作しつと
母桑と桑一君ししてつと飯とバセびして
つとつと一と入者なりと大といふたあり
て釜より煮飯とつと一紙袋つとて俵つ

つとし桑とつとつとつとつとつとつとつと
悪心はくおとに積りつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつと
走る出廟の方よりあれば人々おどろきつと
又つとつとつとつとつとつとつとつとつと
て華れとつとつとつとつとつとつとつと
つと大悪人の歟つとつとつとつとつとつと
云もあつとつと天候つとつとつとつとつと
しつとつとつとつとつとつとつとつとつと

ろくに成の地なりと云々空と云々一は云々
云々に又洪水なり雷いふなる者あり
下る河なりしと待しやと云々
わろ火やうと云々しお聖明所なりと云々
ゆきろく又炭やらの云々しと云々の中
起ろくを居しと云々又云々人の毛をもちて
薪大より積てやと云々二思て灰と云々
ありと云々

他財と換えしと後自害して歟す

江戸尾張町一町目と云々や云々と云々
の金千両の金盡と云々めと云々を聖の酒
の太ふつと云々停止の位と云々の所して
これ究竟の幸なりと云々件の金と云々換掠
と云々と本手と云々して千両と云々の富貴と云々
矢室八の八朝の礼と云々と云々と云々と
と云々と云々と云々と一階と云々と云々と
人の財室と云々と云々と云々と今懺悔と云々と
と云々と呼て左右の腰腹と云々と刀と云々と二三刺

返しきりてくねりあき傍て刀でめきこき
しうと疵きあつて八九日してふさふさ

貪財の嫁娘類族刑とふいふ

京油小治の賀部屋壽幸といふ者財富家
づきづきして嫡子と嫁といふに嫁の粒は
欣して金二百両もまりしとて後夫あり
今も百両お持ちしといふ人のありしてはて
てうやもよりやうけ壽幸ハ大欲無厭のん
まかりしうは頼てけいめといふ人謀て

ひそやと婚れぬとて究めずしとて其夫今の嫁の
二百両といふらんる流石と惜なりとれは嫁の
乳母と下男とてふはきけりて嫁に
衣の金名をききしとたもけりてお婆
美でゆせんといふやと云合ふれば
うな鄙き本性のうといふれど縁の款ふ
ひきし後の災もききしに似たりとて腰
本中君の女までききしこれ流しにあり合ふし
何れ乳母嫁の款といふけりて下男の

それや武義の尾花の末の穂よ出て習ひ
そめまじや〜何れもえんおれも痛〜
ゆゑ一あ二あのだ〜いハ誰〜ハあ〜
女ハ只飛渡りやき〜男のあ〜い〜
ま世おと海〜く〜と笑の中に計で合
笑〜〜あ〜れハ嫁ハ顔と何〜め何〜
思〜い〜すのさ〜も〜や自〜と抱〜き〜
し昔ハ只一す〜に夫の〜い〜
りや〜教〜し〜ハ〜い〜
ぬ

う〜云〜る〜や〜き〜し〜ハ〜八割〜ふ〜せ〜
ふ〜い〜む〜も〜不〜あ〜の〜き〜名〜ハ〜
し〜め〜あ〜け〜い〜ハ〜男〜あ〜び〜ま〜
〜い〜や〜の〜あ〜れ〜ハ〜女〜も〜
ふ〜角〜と〜告〜〜に〜何〜の〜く〜嫁〜が〜不〜あ〜也〜
あ〜て〜い〜〜あ〜親〜ね〜ど〜も〜意〜趣〜と〜
初〜の〜求〜め〜頓〜て〜
し〜ら〜ば〜乳〜母〜と〜下〜男〜と〜と〜拷〜問〜
五〜の〜ま〜に〜白〜状〜〜あ〜れ〜バ〜則〜壽〜幸〜夫〜婦〜
嫁〜子

乳母下男腰りや中老の女まであらずむ
上中下といふに――壁よりいふに――
瀬取――財宝ハたうく彼嫁に賜ふと也
父と裁――属減す

尾州清水をふくし者の子を以ておハハ比叟
る娘を妻にむくんとりして親をじめ
一族口とて海へ舟とて云くやど又よ用る
りててびく――まぐ名く不和ふりし親も
中りきりゆれハ夫婦にせ令セ朝方の食

自ハ美味と嗜みて親ハ下人といひくま
父も堪忍くやうてやけ悪人ハ世上の足
しみやんとなひひそや新帖とてやめ
夫婦のそのあうて舅の惣集とてお孫て竊
り父と裁――ち源くやうすとくも皇天
覆るれば一執の者やつとて以て衆人悦服
き――世間へハ自害と披露――高岳院
わく――やけおくうるもの楚忽とて
寺社より取へるりしは則檢使来り

自害^{じがい}すハ何^{なん}とずと金義^{きんぎ}安^{やす}定^{じやう}一^{いつ}男^{おとこ}も同心^{どうしん}
しるも何^{なん}とずと想^{おも}ふ父^{ちち}も寺^{てら}尾^お内^{うち}區^くと
成^{なり}瀬^せ吉^{きち}なつとふとぶく山^{やま}歌^{うた}もあてやふとの
るハ侍^{しやう}はにりもきふと何^{なん}とずとて様^{やう}多^たす
位^ゐて前^{まへ}や別^{わか}させとふと衆^{しゆ}を妻^{さい}ハ亡^なく思^{おも}ふあて
磔^{はり}す何^{なん}とずとふと衆^{しゆ}を死^し骸^{がい}もあてと磔^{はり}す
あての思^{おも}ふ何^{なん}とずとふと高^{たか}岳^{がく}院^{いん}より一^{いつ}ふ
寺^{てら}ふ入りし尸^{しかばね}とあて何^{なん}とずとハ叶^{かな}はる法^{はふ}式^{しき}なり
強^{つよ}て訴^うへらる一^{いつ}ふと思^{おも}ふ何^{なん}とずとあて何^{なん}とずと

のたハ何^{なん}とずと一^{いつ}ふと思^{おも}ふ何^{なん}とずと何^{なん}とずと
一^{いつ}族^{しゆ}のあて何^{なん}とずとあて何^{なん}とずと何^{なん}とずと
と腹^{はら}き何^{なん}とずと何^{なん}とずと何^{なん}とずと何^{なん}とずと
れ一^{いつ}史^し室^{しつ}七^{しち}のりも也